



マイクロファイバーで磨いた A 児の泥団子(2月末)

もっと、ピカピカの泥団子にしたいな



手順を示したポスター

「A君のが一番きれい」と、写真を指さすC児



台拭きで試した A 児 (1月)



(上)手作りふた付き容器:6月
(下)ビニール袋:8月



「見て!ひびがなくなった」と B 児 (5月)



絵本『どろだんご』より

だいじょうぶ だいじょうぶ
そうと みず
どぼと つけて
もういちど やりなおし

CASE 42

5歳児



「ピカピカの泥団子を作ろう!」

協力園
両川こども園

(これまでの経緯)

年長に進級して間もなく、A児は年中児の時に遊んだ「泥団子を作りたい」と話しました。A児がみんなに思いを伝えると、友達も「年中の時は、すぐにひびが入ったね」「置いたらすぐに壊れた」など、その頃のことを思い出します。保育者は、絵本『どろだんご』を保育室に置き、必要なものを子どもたちと話し合って準備します。園の隣の畑から、みんなで土を運んできました。

5月、「泥団子を作ろう!」と、年長児みんなで遊び始めました。隣で遊んでいる友達は、バケツいっぱいの水を入れて、「泥の水になった」と、急いで土を足しています。それを見たB児は、「水を入れすぎないようにしないと」と言い、バケツの水を半分にしました。少しずつ水を入れながら、「どう?」と、友達に泥の状態を確かめます。友達は、手で泥をこねながら「粘土みたいになった!いいかも」と、合図しました。作った泥団子にサラサラの砂(以下さら粉)を付けて、小さい友達が触らない場所を探して置きました。片付けの後、保育者は、「明日は、どんな泥団子になっているかな?見てみようね」と、話します。

泥団子を作った数日がたちました。作った泥団子は、ひびが入り、触ると壊れるものもありました。ひびの入った泥団子を見たB児が、「やっぱりすぐひびが入るね」と、がっかりした様子でつぶやくと、様子を見ていた友達が、「そういえば、『どろだんご』の本でひびをなくしてたよ」と、言いました。近くの友達も「私も見た!」「復活してた」と、B児に伝えます。そのやり取りを見守っていた保育者は、絵本の挿絵のように、泥団子が浸かるくらいのお湯の水を子どもたちとタライに貯めました。準備ができるとすぐにB児は、「水に漬けて復活させよう!」と、水の中に入れます。「復活した!」「すごい、ひびがなくなったよ!」と、一緒に試した友達と驚きの声を上げて喜び合いました。保育者も、一緒に喜びます。C児は、「水をきれいに付けよう!」と、乾いているところがないように丁寧に水を付け、牛乳パックで作ったトレーに入れました。

6月、晴れの日が続いています。子どもたちは、復活させた泥団子に再び、ひびが入っていることに気付く、「お日様で、すぐに乾いちやうね」と、話しています。しばらく考えていたB児が「お母さんが『料理を守る』ってラップをしている。ラップをしてみよう?」と、提案しました。友達が「ラップは風で吹き飛ばすかも。ふたをするのはどう?」と言いつつ、ふた付き容器で試してみることがになりました。子どもたちは、豆腐パックやゼリーカップ等でふた付き容器を作り、復活させた泥団子を入れます。保育者は、泥やさら粉の準備をし、いつでも泥団子の修理ができるようにしました。

8月、ひびを修理できるようになった子どもたちは、絵本のようにツルツルの泥団子のようにしたいと試すようになりました。「さら粉を付けると、ツルツルにならないね。付けなかったらいいのかな?」と、つぶやきながら遊んでいる子どもがいます。手でさら粉を少し落としたりした時に、偶然、黒くならずました。「こうやって、手でこするよ。手でこすると黒くならずツルツルが出るよ」と、みんなに教えます。「本当だ!ピカピカになる!手で磨こう!」子どもたちは、手で磨いてふた付き容器に入れました。

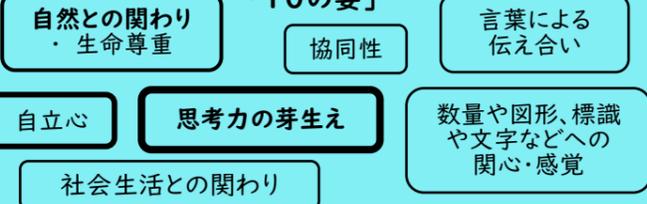
ふた付き容器で保存していた泥団子は、数日たつとまた、ひび割れました。気付いたB児は、「ふたに隙間があるから乾くんた」と言うと、A児が「風も入るからだ」と言いました。B児たちは、ビニール袋に、ふた付き容器ごと入れるか、泥団子を直接入れるか両方を試した結果、直接ビニール袋に入れました。子どもたちは、泥団子を磨いていく日々が続きます。

1月、保育者は保育室に『もっとつるびかにしてみよう!』と泥団子を作る手順を示した6枚の写真入りのポスターを貼りました。ポスターの写真を見たA児は、ティッシュでこすっていましたが、数回するとすぐに破れました。その後、給食で使っている台拭きでこすり、「光ってきた」と、驚きの声をあげ、一生懸命に磨きました。「他の布でもやってみよう」と、A児が保育者に伝えると、保育者は、A児と一緒に磨く物を探し、スポンジやタオル、マイクロファイバーの布などを準備しました。A児は、それらを全て試して、「マイクロファイバーが一番ピカピカになる」と、保育者に言い、話し合いの場でも、友達に伝えました。子どもたちは、今の自分の泥団子の状態を確かめようと、ポスターの周りに集まっていました。C児は、「さくら組が一番きれいな泥団子はA君のだね」と、茶色の泥団子を指さすと、A児は、嬉しそうに笑います。それからも毎日磨き、ピカピカになってきました。

3月、年少児も「ピカピカ泥団子、作ってみたい」と、園ではピカピカ泥団子作りが大流行しました。保育者は、年長児だけではなく年少児も作ることができるように、バケツやタライを多めに用意しておきました。年少児がうまくいかない時には、「こうやったらカチカチになるよ」「つるつる団子は乾いてから磨くといいよ」と声をかけたり、やって見せたりして積極的に教える年長児の姿が見られました。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

「10の姿」



身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気づき、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにしていくようになる。

事例から見られる10の育ち

思考力の芽生え

B児は、今までの経験や、友達との遊び方を見て、丁度よい水の量があることに気づき、水の量を予測し、友達と協力しながら、効率的に泥を作った。また、友達と泥団子のひびを無くすための情報を収集し、成功したことを喜び合った。その後、またひびが入ったことで、水分が逃げないことが大事ではないかと考えた。

ひびが入る度に原因を探り、聞いたことや体験したことなどを思い出しながら、友達と試しながら、一番良い方法を見つけていった。

自分が納得するまで原因を考えたり、成功するように工夫したりして遊ぶ経験は、今後の生活で、主体的に問題を解決する態度へとつながっていくと考える。

事例から見られる10の育ち

自立心

A児は、昨年度楽しく遊んだ泥団子をもう一度作ってみたいと思った。

写真のように布のような物を使って磨けば、もっと光るのではないかと考え、試行錯誤した。自分の思うような泥団子の光り方に満足し、その方法を保育者や友達に伝えることで、やり遂げたことを認められ、達成感を味わったと思われる。

幼児期に育まれた自立心は、小学校生活において、生活や学習での課題を自分のこととして受け止めて意欲的に取り組む姿につながっていくと考える。

思考力の芽生えと自立心

保育者の援助・環境構成のポイント

発見を楽しんだり、友達の考えを取り入れたりし、遊びをより楽しむようとする気持ちが育つように

- 考えたことを繰り返し確かめられるように、材料や場、時間の確保をする。
- 仲間同士で発見を共有できるように、見守ったり、友達に分かりやすく話せるように促したりする。

楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつように

- 泥団子ができていく様子をポスターで、視覚的に提示する。
- 自分で考えたことを試すことができるような、時間の確保をする。
- 子どものよさが友達に伝わるように学級の中で認め合える機会をつくる。